

大学入学共通テストおよび国公立大二次・私大

大学入試

分析と対策

2025
令和7年度

英語

学校法人 河合塾
英語科講師 江本 祐一

启林館

この冊子の内容は次の URL からもアクセスできます
<https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/kou/english/support/>

(1) 概要

共通テスト5年目の2025年度の本試験（以下すべて本試験についての記述）は、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解する力を引き続き重視する」、「情報や自分の考えを適切に表現したり伝え合ったりするために、理解した情報や考えを整理したり、何をどのように取り上げるかなどを判断したりする力を重視する」、「コミュニケーションを支える基盤となる音声や語彙、表現、文法等に関する知識や技能についても、上記の力を問うことを通して引き続き評価する」という問題作成方針に従った出題であった。2022年に発表された大学入試センター発表の試作問題通り、リーディングでは、大問数が6から8へと増加したが、2024年度前までのA・Bといった出題形式ではなく、問題が整理された印象。第4問には試作問題Bで示されたレポートの推敲問題が出題され、第8問には試作問題Aで示された3つの段階を踏んでレポートを完成する問題が出題された。2023年度から出題の続いている物語文の出題は2025年度も第6問に出題された。リスニングでは、試作問題に沿った変更点としては、第5問の問32、問33が2人の発言を聞き取り答える形式となった。また、第6問Bでは、会話の参加人数が4人から3人に変更された。そのほか、第4問Aは2024年度のイラストの並べ替え問題ではなく、2023年度と同様のグラフの完成問題が出題された（第4問Aの出題形式は偶数年度と奇数年度で出題形式が固定されている）。第3問以降は読み上げ回数が1回の問題が出題されたが、読み上げ回数1回の問題の配点は、2024年度までの59点に対し、42点と下がっている。選択肢等を含めたリーディングの語数は約5,600語で、2024年度の約6,300語から700語程度減少している。共通テスト初年度の2021年度の約5,500語から増加傾向が続いていたが、初めて語数は減少した。リスニングの読み上げ語数は1,592語で、これは2024年度の1,547語から微増している（読み上げ語数の微増はここ数年の傾向）が、設問等の読むべき語数は515語で、これは2024年度の585語から微減している。マーク数は、リーディングは44で、これは2024年度の49から減少している。リスニングは37で、2024年度と同じであった。大学入試センター発表の平均点は、リーディングは57.69点で、2024年度の

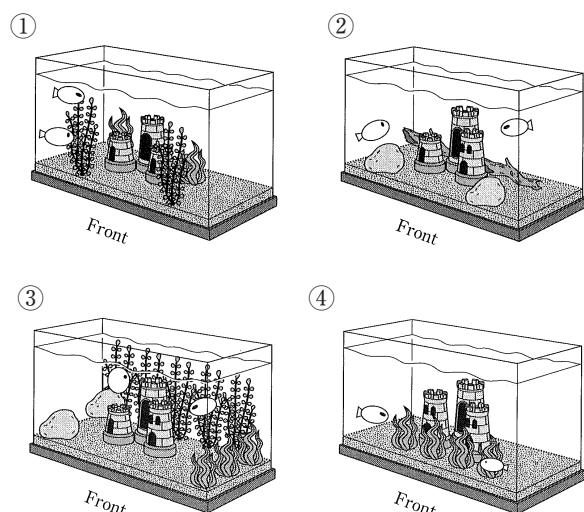
51.54点から6.15ポイント上がった（2023年度は53.81点、2022年度は61.80点、2021年度は58.80点）。リスニングは61.31点で、これは2024年度の67.27点から5.96ポイント下がっている（2023年度は62.35点、2022年度は59.45点、2021年度は56.18点）。リーディングの平均点の上昇は、全体の語数が減ったこと、正解を選ぶのに迷い時間を浪費するような問題が特になかったこと、さらには各種模擬試験で試作問題に類似の問題に数多く触れることで、受験生の側の対応ができていたことが原因と考えられる。リスニングの平均点の低下の原因は、全体として読み上げの速度が例年よりも速かったこと（確実に得点したい第1問の読み上げ速度は、例年は1分間に約150語であるのに対して、2025年度は約190語であり、特に問1、問2は200語を超えて）、第5問が答えにくい問題であったことが考えられる。リーディング、リスニングともアメリカ英語だけでなくイギリス英語も出題されている。また、本文の表現、読み上げられた表現を言い換えた選択肢が正解になる問題、複数個所から集めた情報を元に正解を選ぶ問題が出題されている。

(2) リーディング

第1問 パンフレットの読み取り

はじめて水槽で魚を飼う人を対象にしたイラスト入りのパンフレットの読み取り問題。問3の出来が悪かった。設問と該当する部分は次の通り。

問3 According to the pamphlet, which picture best shows how to decorate for fish from slow-moving water?



(中略)

該当部分（イラスト省略）

2. Select decorations

(前略) Fish from fast-moving or deep water need solid objects such as small rocks and logs. Those from slow-moving or shallow water prefer soft objects like plants. (後略)

3. Position decorations

Fish need room to move. Leave space around the edges of the tank. Place tall decorations and plants at the back, and put short ones at the front.

2025年度大学入学共通テスト 英語 リーディング 第1問

2. Select decorationsに「流れの緩やかな、あるいは浅い水域の魚は植物のような柔らかい物体を好む」とあることから、石を含む②と③は排除され、**3. Position decorations**より「背の高い植物が前面に配置されている」①が排除され、正解は④となるが、河合塾の共通テストトリサーチでの正答率（以下正答率は河合塾の共通テストトリサーチによる）は35.2%で、完答が求められる問題以外ではもっとも正答率が低い問題だった。③を選択した受験生が44.8%で最も多かったが、③は「石が含まれていること」「端まで植物が植えられていること」のいずれの意味でも不適切である。急いで英文を読んで必要な情報を集めることができなかったのか、イラストをしっかりと見なかったのか、はっきりとした原因是わからないが、意外な結果であった。

第2問 ブログの読み取り

「空飛ぶ乗り物」に関するフォーラムに参加したイギリス人作家のブログを読み、設間に答える問題。2024年度同様に「事実」ではなく「意見」を問う問題が出題されている。**問2** の Flying vehicles will most likely [5] . is, 第2段落の Finally, from a safety point of view, they said that flying technology would need to be well tested and controlled to avoid accidents in the air.の下線部を言い換えた④ require proper assessment and regulationが正解であるが、正答率は45.2%で、あまり高くなかった。

第3問 エッセーの読解

「バンド活動での失敗と教訓」を描いたエッセーの読解問題。**問2** は出来事を時系列に並べ替える問題。全体の正答率は40.3%であるが、高卒生の正答率は67.1%であるのに対し、現役生の正答率は39.1%で、2025年度の出題中、現役生と高卒生で差が最もついた問題。同様に

出来事を時系列に並べる問題である**第6問の問1**も現役生と高卒生で大きく差がついた。いずれの問題にもダメの選択肢が1つ加わっていることも、差がつきやすい原因の1つであろう。

第4問 レポートの推敲

試作問題Bと同様の出題で、2025年度で初の出題形式であるが、先述の通り受験生の対策は比較的よくできていたようである。**問1**、**問4**は試作問題同様にCommentに合わせて適切な語や文を補充する問題で、**問2**はパラグラフの内容の結論となる文を、**問3**は全体の要旨となる文を選択する問題。

第5問 メールの読み取り

複数のメールを読み取る形式の出題。**問2**は学生のメールの中の進行表と教授のメールの内容の両方を考えて解答する必要のある問題。また、**問4**は教授のメールの内容から、正解となるイラストを選ぶ問題。

第6問 物語文の読解

作家志望の友人の書いた「2人のスーパーヒーロー」に関する物語を読み、それに対するフィードバックのメールを完成させる問題。2024年度の**第5問**同様に、時系列に沿って書かれているのではない物語文からの出題で、出来事を時系列に並べる**問1**は、全体の正答率が30.1%と非常に低く、現役生と高卒生の差も23.7ポイントと大きく開いた。

第7問 論説文の読解

「動物の睡眠パターン」に関する記事を読み、発表のためのメモを完成する問題。不要なものを選ぶ問題（**問1**）や適切なグラフを選ぶ問題（**問2**）、タイトルを選ぶ問題（**問5**）などが出題されている。

第8問 レポート作成

「宇宙開発」に関して、試作問題Aで出題された問題同様に、3つのステップを経てレポートを完成させる問題が出題された。本文は800語を超え、2025年度の出題の中で最も多い。最後の設問である**問5**はグラフ中に与えられた数値をもとに、各選択肢で述べられている事柄にかかる費用を考え、その正誤を判定していく問題で、かなり煩雑な処理が求められる。全体の正答率は36.0%で出来は良くなかった。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

例年、後の問題になるにつれて正答率が下がっていくが、総語数が700語近く減少した2025年度も、「最後まで解き切れなかった」という受験生からの報告があった。このような声を聞くと速読力が必要と言えるかもしれないが、内容理解を伴わない速読力には意味がないこ

とは言うまでもない。まずは、文法的理解に基づいた正確な読解力を養い、語彙力を高めていくことで、自然に英文が正確に早く読めるようになる、ということを目指すべきである。読み返しを減らすことが、結果的には速読力を高めることにつながるのではないかと思う。また、本文中の表現そのものが正解の選択肢となることはまずない。何らかの言い換えがなされているのが普通であり、その意味では単語・熟語の知識の拡充も必要である。受験生になじみのない単語が含まれることが増えているが、全体の内容がわかれれば問題にならない程度のものである。普段から、少しくらいならわからない単語があっても全体を読み切るようにトレーニングすることが必要であろう。

(3) リスニング試験

第1問

A: 短文の内容一致 B: 短文のイラスト選択

Aでは、短い発話を聞きその内容と合っている選択肢を選ぶ問題が4問出題されたのは2024年度と同じである。Bでは、短い発話を聞きその内容と合っているイラストを選ぶ問題が4問出題された(2024年度は3問)。先にも述べた通り、この部分の読み上げ速度が例年になく早かったせいか、全体の正答率は62.4%(2024年度は82.0%)であった。特に正答率の低かった問4を取り上げる。

[スクリプト]

I wonder where we'll go on next year's field trip.
Not far, I hope.

[選択肢]

- ① The speaker doesn't know where they will go.
- ② The speaker hopes they won't go anywhere next year.
- ③ The speaker wants to travel somewhere far away.
- ④ The speaker wonders if there will be a trip.

2025年度大学入学共通テスト 英語 リスニング 第1問

I wonder where we'll go on next year's field trip. から、話し手は来年の校外見学の行き先を知らないために、相手に尋ねていることを理解し、①を選択する問題であるが、全体の正答率は38.7%であった。選択率の最も高かった誤答は、スクリプトに出てくるwonderを含む④で、28.2%であった。

第2問 対話文に一致するイラスト選択

短い対話文とそれに関する問い合わせを聞き取り、その答え

として適切なイラストを選ぶ問題が3問(2024年度は4問)出題された。第2問全体の正答率は85.2%で、すべての大問の中では最も高いが、2024年度は9割を超えていたことを考えると、ここでの得点率の低下も全体の平均点を下げた要因の1つと言えるかもしれない。

第3問 対話文の内容一致

例年通り、短い対話文を聞き取り、一致する選択肢を選ぶ問題が6問出題された。第3問以降は音声が流されるのは1回のみ。全体の正答率が6割程度であるのも例年通り。ここでも、聞き取った内容を言い換える力が試されている。

第4問

A: イラストの並べ替え問題 B: 複数発言からの判断

先にも述べた通り、奇数年度の2025年度は、Aではグラフの完成問題が出題された。また例年通り表の空所を埋める問題(週間天気予報の聞き取り)が出題された。「選択肢は2回以上使ってもかまいません」という指示文があるが、2024年度同様に実際に複数回使う選択肢はなかった(2022年度、2023年度には複数使用の選択肢あり)。Bは例年通り、4人の説明を聞き取り、示された条件に最も合うものを選ぶ問題。2024年度は全体の正答率が8割を超えていたが、2025年度はここでも正答率が下がり、7割にも満たなかった。

第5問 講義

贈り物が無駄にされる問題に關し、環境を守るためにの方法としてのregifting(贈り物の使い回し)に関する講義を聞きワークシートを完成させる問題、グループの2人のメンバーの発言が講義内容と一致するかを判断する問題(試作問題Cと同様の出題)、グラフつきの内容一致問題が出題された。例年この大問の正答率は低いが、2025年度は特に低く、37.2%だった。ワークシート自体は2024年度同様にかなり簡素化されたものだが、このワークシートの補充問題である問28~31の出来が非常に悪かった。少し長くなるが、該当する部分のスクリプト、ワークシート、選択肢は次の通り。

[スクリプト]

In a survey of Americans, (中略), many are reluctant to regift. Another study showed (中略) felt bad about it, (中略). Even though 90 percent of the final gift receivers were content with their gifts, it seems clear that regifters remain overly concerned.

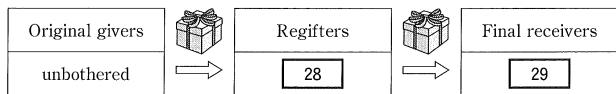
How can we change the way regifters feel? (中略)

This information made the first group feel regifting was OK, (中略). Events like this would encourage positive attitudes towards regifting.

Another idea would be to promote systems (中略) people would hardly ever throw away unwanted gifts.

[ワークシート]

How people currently feel:



How to promote regifting:

- Events — regifting becomes 30.
- Systems — wasting gifts becomes 31.

[選択肢]

- ① acceptable ② progressive ③ satisfied
④ unappreciated ⑤ uncommon ⑥ worried

28には、ここに挙げたスクリプトの第1パラグラフの are reluctant to regift, felt bad, remain overly concernedを言い換えた選択肢として⑥が、29には were content with their giftsを言い換えた選択肢として③が入る。また、30には第2段落の regifting was OK, encourage positive attitudes towards regiftingを言い換えた選択肢として①が入り、31には hardly ever throw away unwanted giftsを言い換えた選択肢として⑤が入るが、28, 29の正答率は9.8%, 30, 31は14.1%であった。表現の言い換えがうまくできず、混乱してしまったようだ。もっとも、27も up to one-third of those gifts remain unused or are thrown awayを言い換えた②many gifts are unwanted or thrown outが正解であるが、こちらの正答率は64.2%であった。これは thrownの部分が聞こえた音と一致していたことが正答率が高かった原因かもしれない。

第6問

A：対話文内容一致 B：対話文内容一致とグラフ選択
Aでは、食事のとり方に関する2人の会話を聞き、発言中に表明されている意見を選択する問題が出題されたが、2024年度と同様の出題。Bでは鳥にえさを与えることに関する3人の会話を聞き、会話が終わった時点で鳥にえさを与えるべきではないと思っている人の人数を答える問題（問36）と、考えの根拠となる図表を選ぶ問題（問37）が出題され、これも2024年度までと同様の出題。発話者が3人に減ってはいるものの、問36で全

員が反対というこれまでにないパターンであったこともあってか、全体の正答率は2024年度は7割を超えていたのに対して、2025年度は65%程度であった。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

本文の英語がそのまま解答になるわけではなく、1か所だけから解答が決まるわけではない点は、リーディング、リスニングに共通した特徴である。その意味では、同じ内容が別の表現で置き換えられた場合にいかにうまく対処できるのか、ということが決め手になることが多い。リーディングの問題のほうが、読み直しができる分、解答しやすい問題となっている点は異なるが、実質的な違いはほとんどない。その意味では、リーディングの問題をリーディングの問題として扱った後、本文を音声化して、リスニング問題として活用する、といった活用法も考えられる。リーディング問題の英文は分量が多いが、一度リーディング問題として扱った後であれば、リスニング対策として有効であるのではないかと思う。

2

国公立二次試験

(1) 概要

2025年度の主要な国公立大学で出題形式や内容について目についたものを取り上げる。

東京大：2020年度以降、3,000語前後の英文が出題されていたが、2025年度は2,860語で分量はやや減少した。難易度は特に変化はない。毎年のように出題形式に細かい変化がみられる中、2023年度から2024年度には出題形式に大きな変化はなかったが、2025年度は少し出題形式が変化した。具体的には、筆者のラマダーン経験を扱った5で、語句や文の意味を問うマーク式の問題が出題され、soの内容の明示を求める和訳問題が出題された。2(B)の和文英訳問題は従来にない長文の出題となったが、2024年度と比べると英訳しやすい問題だった。再現答案の資料がないため、詳細な出来不出来は不明だが、2019年度から続いている4(A)の誤文指摘問題の出来は悪いと予想される。

京都大：2題の読解問題には、下線部和訳が5問と、2022年度以来3年ぶりに下線部の指す内容を説明する問題が1問出題された。内容説明問題が出題の大半を占める出題がなされた時期もあったが、2023年度にすべての設問が下線部和訳に戻ったのを機に、その後も下線部和訳中心の出題が続いている。やはり「読解力の判定は和訳問題で」というのが京都大のスタン

ス、というところであろうか。もっとも2025年度は、特に難解な構文が含まれることもなく、どの設問も比較的解答しやすいものであった。和文英訳問題は、2024年度同様、いやそれ以上に処理しやすい出題で、その意味ではこれまでの学習成果が如実に反映するような出題であった。自由英作文の問題としては、「人工知能が人間の想像力に与える影響」をテーマとした100語以内の英作文が求められたが、いわゆるパラグラフライティングを求めるような指示文がついたことが、目新しい。

北海道大：2024年度から出題形式に変化はないが、長文読解問題の総語数が、2024年度は2023年度から700語程度減少したのに対して、2025年度は400語程度増加した。とは言え、難易度的には2024年度以上に処理しやすい出題となった。読解問題では、下線部和訳問題の出題は2024年度同様に2問で、そのほかの出題は内容理解を試すものとなっている。①では「ベーシックインカムの利点と欠点」を述べた英文が出題された。本学の特徴的な出題である③の読解問題と自由英作文の融合問題、④の会話文の要約問題も引き続き出題されているが、③は2025年度は従来以上に解答しやすい出題であった。デジタルリテラシーの世代格差を扱った④は、要約の基となる会話文自体をほとんど読まなくても解答できる問題である。

東北大：読解問題では、2024年度は従来の下線部和訳と日本語による内容説明問題に加えて、誤文指摘問題、文の挿入問題、語句整序問題などが出題され、例年ない多様な形式であったが、2025年度は記述問題は減ってはいるが、和訳や説明以外の形で読解力を試す出題がなされ、難易度は上がっている。①では本文の内容をまとめた図表の空所を埋める、といった共通テスト的な形式の問題も出題された。「環境難民」(2022年度)、「人間の脳とAIの違い」「男性の美に関する考え方の多様化」(2023年度)、「アメリカ社会における教育格差」(2024年度)といった時事的な英文が出題されることの多い本学であるが、2025年度も「オーバーツーリズム」を扱った問題が出題されている。なお、このテーマは北海道大、筑波大、大阪公立大でも取り上げられている。④の英作文の問題は、語句整序、和文英訳が出題された。和文英訳問題は例年なく難易度が高い。

一橋大：2023年度までの超長文(1,500語程度)の読解問題が、2024年度に2つの読解問題に分かれだが、2025年度も同様の出題。読解問題の総語数は2題合

わせて1,500語程度で分量的な変化はない。①は和訳と日本語による内容説明のみ、②は記号問題のみという点も2024年度と同様。ただし、②は2024年度は空欄補充10か所と語句整序2問のみという形式であったのに対して、2025年度はthatとwhatについて、その用法を問う問題が新たに出題された。③の問題は本文全体を読まなくても該当箇所を読めば解答できる出題であった。与えられた問い合わせに対する答えを100~140語で答える問題が2024年度に出題された自由英作文は、与えられた状況に置かれた人に対するメッセージを書く問題になった。これは2017年度の手紙を書く形式の問題に近い出題である。なお、2025年度からリスニング問題が廃止されたが、それに代わる問題の出題はなく、その分、受験生は余裕をもって問題に取り組めたであろう。

名古屋大：読解問題では下線部和訳問題が3問から2間に、内容説明問題が3問から1間に減ったが、②で出題された問題は、空所に入る英文の選択肢を選ぶとともに、その根拠を60字以内の日本語で説明する問題であった。本文全体の内容を踏まえて書くことが求められており、難しい問題である。また、2024年度に出題のなくなった和文英訳問題は2025年度も出題がなかった。③の対話文問題に含まれる自由英作文は例年通りの出題。④の自由英作文は年度によって出題形式が変わり、グラフの読み取り(2023年度)、錯視を表す図に関する説明問題(2024年度)に対して、2025年度は「ソーシャルメディアが社会におけるコミュニケーションに及ぼす影響」「ソーシャルメディアがなかったら自分の生活はどうなっているか」について、それぞれ30~40語、40~50語で書く問題が出題された。他大学と比較すると語数が少ないのが特徴である。

大阪大：いろいろな大学で出題形式が変わる中、際立った変化のまったくない出題が続いているが、2025年度もほぼ同様であった。ただし、2025年度は[Ⅱ]の読解問題中に下線部の内容を40~50語の英語で説明するという、大阪大としては新傾向の問題が出題された。また、[Ⅲ]の自由英作文問題では、大阪大としては初めてグラフを使った問題が出題された。与えられたグラフを読み取り、「状況」「要因」「改善案」について英語で述べる問題だが、指定語数80語程度である点は2024年度と同じ。なお、外国語学部は、2024年度までは、[Ⅱ]の長文読解問題と[Ⅳ]の和文英訳問題が他学部とは異なる独自の出題であったのに対し、

2025年度はすべての問題が独自の出題となり、英語の入試問題に関する限り、かつての大坂外国語大に戻ったような印象である。解答は日本語と英語による記述のみで、記号で答える問題の出題がまったくない、というのは例年通り。ただし、[I]の英文和訳問題は大阪大の問題としては抽象度が低い英文が、[II]の長文読解問題では論旨の明確な英文が出題され、[IV]の和文英訳問題では、例年と比べると直訳で十分に対処できる日本文が出題されており、2024年度と比べると処理しやすい出題であった。

広島大：[I]で出題される本学独自の段落ごとの要約問題は、2024年度同様に各段落を60字でまとめる問題。やはり、すべての段落を同じ字数でまとめるのは難しい。[II]の読解問題では2024年度同様に2つの英文を読んで答える問題であるが、2025年度は照合すべき箇所が明確で解答しやすい問題だった。[III]の自由英作文では「仕事の将来の変化」についての100語程度の論述問題が出題され、[IV]では音楽媒体の変化に関するグラフを読み取り、100語程度の英文で傾向について説明と分析を行う問題が出題された。

九州大：2024年度に、読解総合問題が3題、自由英作文問題が2題という出題形式になり、読解130点、作文70点という配点になったが、2025年度も同様。[1]の読解問題中に英語による内容説明問題が出題された点が目新しい。2題出題される自由英作文は、[4]は「2つの旅行計画のうちどちらを選ぶか」、[5]は「日本の商店街の衰退のもたらす影響」について、それぞれ100語、80語で論じる問題。

そのほかに特徴的な出題としては、小樽商科大では、解答用紙には英語以外書くことのない出題が続いていると同時に、本学の特徴的な出題である与えられたAnswersに対する質問文を作る、という出題が続いている。札幌医科大では「5秒ルールの歴史と科学的検証」を扱った興味深い英文が出題された。東京医科歯科大と東京工業大が統合して1年目の東京科学大では、医歯学系と工学系で別々の出題がなされたが、それぞれ従来の大学の出題が引き継がれた。名古屋工業大と静岡大の情報学部情報学科では、合教科・合科目的な問題として、数学と英語の合教科を意識した出題が続いているが、2025年度の静岡大の情報学部情報学科では、英文と図で与えられた情報をもとに、論理的に考え、正しい図を選ぶ問題や根拠を日本語で述べる問題が出題されている。

(2) 読解問題

ここまで各大学の分析の中で何度か触れてきた通り、読解問題中の英文和訳の比重は年々下がってきており、そのような中で2023年度以降、和訳問題の比重を高めている京都大は異例であろう。京都大を目指して予備校にやって来る現役生の多くは、京都大向けのテキストの問題を見て「こんな長い英文を日本語に訳すなんてムリ！」という反応を示すことが多く、夏に行われる京都大系の模擬試験では、特に読解問題で高卒生に差をつけられることが多い。読解、特に和訳ということに関しては高卒生に一日の長がある。やがては現役生もその差を詰めていくわけだが、和訳を中心とした京都大志望者向けの問題を中心に勉強している高卒生について特徴的なことは、京都大とは対極にあるように感じられる早慶大にも合格する生徒が多いことである。特に予備校で対策をするわけではないが、しっかりととした読解力の下地がうまく作れた受験生は、早慶の問題にも十分に対応できる、ということであろう。その意味で、今一度和訳の重要性を見直してもいいのではないかと思う。

(3) 表現問題

昨年度も本稿で書いた通り、長文読解や対話文問題に自由英作文を組み込んだ融合問題が増えている。自由英作文とは言えないかもしれないが、2025年度では、先にも述べた通り、大阪大と九州大で読解問題中に英語による記述を求める出題が新たになされた。和文英訳問題よりも自由英作文の問題の出題のほうが多いのも周知の事実であろう。2025年度はAIとソーシャルメディアに関する出題が目についた。AIについては、先に述べた京都大のほかには、京都府立医科大、大阪公立大で出題されるとともに、九州大では読解問題で取り上げられた。また、ソーシャルメディアについては、名古屋大のほか、神戸大、鹿児島大でも出題された。例年指摘している通り、実際の出題形式としては自由英作文の出題のほうが多いとはいえ、和文英訳は自由英作文で正しい英文を書くための前提と言えるので、従来型の和文英訳の練習も不可欠であろう。

3

私立大学

私立の出題形式は大学や学部で千差万別であるが、読解問題では、空所補充、下線部の言い換え、内容一致などのオーソドックスな出題形式に加えて、ある意味トリ

ッキーでパズル的な、言いようによっては運で左右されるような要素を加え持った出題がなされるのも特徴である。その意味で、早めに受験大学の問題に目を通して、どのような問題が出題されているのかを確認しておくべきである。慶應義塾大、早稲田大などを中心に一部の難度の高い大学で、主に「読む・書く」を中心とした技能統合問題が出題されている。空所補充や言い換え問題では、単語や熟語等の語彙的知識をそのまま問う場合と、文意を把握したうえで未知の（あるいは難解な）語句の意味を推測する必要がある場合があるので、基本的な語彙力の強化と英文内容の理解力を高めておく必要があるという点では、国公立大の場合と違いはない。国公立・私立を問わず、読解問題の長文化が進んでいるが、客観問題の出題が多い私大の問題は、1題の英文量が多いだけでなく問題数が多いのも特徴で、限られた時間で設問に答えるトレーニングが絶対に不可欠である。いずれにしても、大学間で出題形式に大きな差がある。安易に過去問中心の学習を進めることはできないが、ある程度基礎的な力を身につけたら、先にも述べた通り、過去問演習を中心に学習を進めるべきであろう。ただし、過去問がもう一度出題される可能性はないので、その大学の出題傾向に似た他大学の過去問、特に難度の高い大学の読解問題対策としては、過去問に出典として挙げられている出版物なり、ウェブページなりにあたってみるのもいいかもしれない。2025年度に特に目についた問題をいくつか取り上げておく。

上智大の外国語学部では2024年度に続いて長文中の誤文訂正の問題が出題されているが、find an recipeをfind a recipeと訂正するなど、出題内容に首をかしげるような問題も出題されている。

2023年度から記述問題の出題が始まった慶應義塾大

の理工学部では、2025年度の記述問題はごく短い和文英訳問題のみで、2024年度同様に日本語による要約問題の出題はなかった。4の單文空所補充問題では、「宇宙は膨張している」という一般教養や、「地震波」という専門的な知識を前提とした問題が出題された。早稲田大の国際教養学部では、400語程度の英文を日本語で要約する問題が出題されている。2025年度のテーマは「食中毒」であった。また早稲田大の基幹・創造・先進理工学部では論理クイズ的な出題が続いている。2021年度から総合問題の一部として英語が出題されている早稲田大の政経学部では、グラフの選択問題の出題が続いている。ただし、2025年度は、これまでの情報を整理して簡単な計算をする、いわゆる情報の処理能力を問う問題ではなく、単純な内容一致問題となっていた。

江本 祐一（えもと・ゆういち）

河合塾で京大、医進の授業を中心に担当。京大系のテキスト、京大オープン（第2回チーフ）、及び高1から高3までの最上位テキストの作成に携わる。出版物は「英語暗唱文ターゲット450」（旺文社）、「入試英単語の王道」（河合出版・共著）など。